紹介

上島有編著『東寺文書聚英』

本書は、東寺旧蔵の古文書の中でも、特に重要な文書として別置され、現在も東寺に収蔵されている「東寺文書」について、ほぼ全文書にわたる写真を載せ、これに詳細な解説を加えたものである。編者の上島氏は、長年京都府立総合資料館において、「東寺百合文書」の整理事業に取り組まれ、その成果を同資料館編『(正・続・続々)図録東寺百合文書』等によって紹介されてきた。本書は、こうした氏の御仕事の延長上にあり、またその一つの完結をなすものと言える。

本書は図版編と解説編の二分冊より成る。図版編では、現存する「東寺文書」のうち、一部の案文等を除き、若干の新史料を加えた五〇六通の文書の写真を掲載している。写真は精巧で十分な大きさがあり、古文書学研究の資料となる事を意図している。新史料としては、第一に、近年東寺の収蔵庫から発見された十二通の文書が紹介されている。中でも鋳物師関係の綸旨の確かな正文では最も古い部類に属する、応永二〇(一四一三)年の称光天皇綸旨や、抄出の形でしか知られていなかった天喜三(一〇五三)年の「大和国弘世庄検田丸帳」は特に注目される。第二に、近年京都府によって進められた東寺観智院金剛蔵聖教調査の成果の中から、十二通の文書を紹介されている。この中には、文永九(一二七二)年の十八口供僧連署置文案や、貞和五(一三四九)年の根本廿一口供僧置文という、中世東寺にとっての根本的な史料が含まれている。

解説編は「総説」と「各個解説」に分かれ、「総説」では東寺旧蔵の古文書の中での「東寺文書」の位置づけが解説される。ここでは明治二〇年に作られた『東寺古文書目録』、及びその後の調査・整理の記録と「東寺文書」の現状とが詳細に検討され、当文書の伝来状態の変遷が明らかにされる。更に、新たに紹介された史料の位置づけも含めて、東寺旧蔵文書全体の構成が簡潔にまとめられている。

「各個解説」では、編者のもとで「東寺百合文書」の整理に携ってきた執筆者も加わり、各文書について、東寺の歴史の中でのその文書の位置づけと古文書学上の意義とを焦点に、長文の解説が加えられている。これは、編者らの長年の東寺旧蔵文書研究の集大成とも言うべきもので、内容は多岐にわたるが、特に南北朝〜室町期の古文書学の再構成に多様な問題を提起していると言えよう。また、「東寺百合文書」等に収められている関連文書についての言及もなされているので、膨大な他の東寺旧蔵文書を使用する導入部ともなり得るであろう。巻末には文書の釈文(一部を除く)と編年索引、署名・署判索引、文書索引を付す。

以上、概略を紹介したが、東寺旧蔵の古文書の中では、原本にあたる事が特に困難な「東寺文書」について、古文書学的検討に耐える史料集が出版された意義はきわめて大きいと言わねばならない。ただし、本書では「東寺文書」のうち、現在原本が確認できる文書を掲載し、他出して影写本のみに見える文書については取扱っていない事には注意する必要がある。しかし本書は、原本を紹介する書として、図版・解説の質

・量ともに一つの理想を実現しており、「東寺文書」の利用の将来にわたる基準となる事は間違いない。

（B4判　図版篇三三二頁　カラー図版六点・モノクロ図版六〇四点　解説編二七四頁　同朋舎出版　一九八六年一〇月　四八〇〇〇円）

（伊藤俊一　京都大学大学院生）

川北　稔編
『「非労働時間」の生活史——英国風ライフ・スタイルの誕生——』

近年、対日貿易不均衡との関連で、日本人の「働き過ぎ」に対する批判が頓に高まりつつある。こうした批判の先鋒に立つ西欧諸国においても、余暇の成立とその社会的承認は工業化以降の経験にすぎず、またその展開は、現代的な「レジャー」という語のニュアンスでは包み切れぬ諸々の歴史的局面を有するものであった。本論集は英国における余暇活動の成立とその歴史的展開を論じた、イギリス都市生活史研究会による『路地裏の大英帝国』に次ぐ研究の成果である。以下、本書の順にしたがって紹介をすすめることにしたい。

第一部「『非労働時間』の成立」には、工業化以前の「非労働時間」の在り方を論じた二論文が収められている。川島論文「暦のなかの娯楽」では、工業化前の農村的社会における民衆娯楽の機能及びその変容とが、上位階層の民衆娯楽観との兼ねあいで論じられる。十七世紀のピューリタンの嫌悪と攻撃とを民衆の伝統的（ピューリタン達の目にはカトリック的、あるいは異教的と映った）娯楽は生きのびた。それは、こうした娯楽・儀式が農村の生活リズム・労働と分かち難く結びつき、また農村社会の縦横の緊密な人間関係の確認と再生産という不可欠の機能を有していたがゆえである。したがって、十八・九世紀の、農村社会への市場原理の浸透と共同体の崩壊によって、こうした伝統的娯楽はその存在意義を喪失するに至る。これに追いうちをかけたのが、十九世紀版ピューリタニズムとも言うべき「合理的娯楽」の運動である。中流階級による、この新たな「都市の農村への戦争」を通じて、民衆の共同体的娯楽への固執は、個人の道徳的怠惰へと読みかえられ、同時に労働時間と「非労働時間」との分離が試みられるのである。

以上の様に、前工業化社会においては、労働と娯楽は分かち難く結びつき、明確な形での「非労働時間」は成立していなかった。あまつさえ、工業化以前には民衆の娯楽活動そのものが批難の対象でもあった。しかしながら前工業化時代にも明確なかたちで「非労働時間」を有する人々が少数ながら存在した。川北論文「時は『カネ』か敵か　前工業化都市の『非労働時間』」は支配階級の壮大な社交場としてのロンドンの在り様に言及している。すなわち、ジェントルマン階層こそが、工業化以前に明確な「非労働時間」を有していたのであり、それは強烈な自己顕示欲に支えられた社交という形で展開される。これが十六—七世紀の交の「ロンドン社交季節」の成立であり、こうした衒示的消費の慣習は上流市民へと広がって行く。しかし、上流市民にとってはコーヒーハウスが、下層民衆にとっては飲み屋がその社交場であった。その意味で工業化以前には、「非労働時間」にこそ階層ごとのアイデンティティ形成の契機があった。ロンドン等の都市と農村的地方との対照を更に際立たせたのは、十八世紀におけ